



目 次 (CONTENTS)

創立 40 周年を迎えて…………… 2 <i>Director's Message upon the 40th Anniversary of CSEAS</i>	<東風南信> <i>Reflections</i> …… 9 35 年ぶりの再訪、タイ <i>Re-visit to Thailand, 35 Years after the First Visit</i>
白石教授今春退職——政策研究大学院大学へ…… 3 <i>Transfer of Prof. Shiraisbi to National Graduate Institute for Policy Studies</i>	<海外疾病だより> <i>Getting Sick Here and There</i> …… 10
東南アジア研究所を去るにあたって (白石 隆) <i>The CSEAS Has Provided Me the Best Research Environment</i>	出版ニュース <i>Publication News</i> …… 11 研究会報告 <i>Report on Seminars</i> …… 12-13 図書新着情報 <i>Newly-arrived Books at the Library</i> …… 13 情報発信サイト紹介 <i>URLs of CSEAS Research Projects</i>
「参加型農村開発行政支援」プロジェクトが 第 1 回 JICA 賞受賞 …… 4 <i>The JICA Prize Newly Established in 2004 Was Awarded to PRDP</i>	<連絡事務所だより> …… 14-15 <i>Letters from Liaison Offices</i>
Five Years in Kyoto (Xianfeng Song) 第 1 回地域情報学シンポジウム「地域研究 における GIS/RS の可能性」開催…………… 5 <i>First International Symposium on Area Informatics: Potential of GIS/RS in Area Studies</i>	<i>Southeast Asian Topographic Map Database</i> …… 15 <Visitors' Views > …… 16-18
地域研究コンソーシアム活動報告 <i>Report on Japan Consortium for Area Studies</i>	
人事 <i>Personnel Changes</i> …… 6-7	
<i>Ecological Destruction, Health, and Development</i> が、第 11 回 APPA 出版賞・学術部門で 金賞を受賞…………… 7 <i>The 11th APPA Book Award Given to Ecological Destruction, Health, and Development</i>	
安場元センター教授逝く <i>Dr. Yasuba, Former Professor of CSEAS, Has Passed Away</i>	
<i>Colloquia</i> …… 8	



京都大学・アジア工科大学 (タイ) 間で初めての
の双方向ビデオ会議が開かれた

(関連記事 5 ページ)

創立 40 周年を迎えて



人生の 40 歳は不惑。今年度、東南アジア研究所はその年齢に達しました。1965 年、全国で最初の「研究センター」として東南アジア研究センターが設置されて以来、はや 40 年が経過したことになります。発

足の当初は、わずか 1 部門、教授・助教授各 1 名と助手 2 名で出発したセンターは、現在、客員部門の 2 研究部門を含め 7 つの研究部門からなり、26 名の専任教員と 7 名の外国人客員研究員を擁する全国でも屈指の地域研究機関に成長しました。「不惑」の年を迎えるにあたり、ここに至る成長の種をまいてくださった諸先輩、またその成長を支えていただいた多くの関係者に衷心より感謝の意を表したいと思います。

草創期の第一世代に代わって、今は、第二、第三世代に代替わりし、第三世代が多数派を占めるようになりました。そして、この間に東南アジア研究も大きく発展しました。世代は代わりつつも、東南アジア研究所（2004 年に名称を変更）は、設立当初のモットーである「学際性」「フィールドワーク」「現代性」という研究スタイルを貫いてきました。また、時代とともに、東南アジア理解への視点もより重層的かつ総合的になり、総合的地域研究あるいは地域間比較研究など、臨地研究に基づく新たな地域研究の手法を今も模索し続けています。

東南アジアを対象に研究する研究者・学生もひと頃とは比べられないほどに増加しました。かつては長期のフィールドワークによって臨地研究を行っていましたが、現在では、調査のスタイルも随分と変わり、頻繁に東南アジアとの間を往還する研究者が増えています。現在の所員の多くも、このようなスタイルで数多くのプロジェクトに関わるようになっています。

また、研究所を巡る環境もこの 40 年間に大きく変わりました。とりわけ、この 10 年間は経済のグローバル化、情報技術の進展のなかで、日本と東南

アジアとの関係、そして東南アジアをとりまく国際関係に大きな変化が生じています。かつては、ベトナム戦争後に急速な経済発展を遂げた東南アジア各国に対する関心が東南アジア研究を牽引してきました。しかし、今では、東アジアや南アジアとの連関のなかで東南アジアを理解しなければならなくなっています。ネットワーキング、クロスボーダーなどの言葉とともに、より広い視野からの東南アジア研究の必要性が高まっています。

研究者や研究分野の裾野の広がり、そして研究対象である東南アジア地域をとらえる視点の多様化を見ると、40 周年を迎えたからと言って「不惑」などとは言っておられない状況にあるのは確かです。この 40 年間に培ってきた各国の研究者とのネットワーク、そして諸先輩の苦勞の賜物でもある図書や地図等の所蔵資料は「不惑」と呼ぶにふさわしい研究所の財産となっています。しかし、今も大きく変動している東南アジアを前にするとき、研究所のスタッフは常に「学に志す」青年の気概を持つ必要があります。研究所の全スタッフにとって、この 40 周年が、研究所の来し方、行く末に思いを巡らす好機会になればと願う次第です。

そういう機会となることを期待して、40 周年記念シンポジウム“Southeast Asian Studies: Institutions and Interventions”および記念式典・祝賀会を 10 月 28 日（金）午後 1 時から京都大学百周年時計台記念館で開催することとしました。シンポジウムには、東南アジア研究所の元客員研究員で現在東南アジア研究の第一線で活躍中の研究者らを招き、東南アジア研究の回顧と展望を語り合うこととなります。関係の皆さまにはあらためてご案内を差し上げますが、当日のご来駕を心待ちにしております。また、この機会をかりまして、研究所ならびに所員一同への一層のご支援とご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

（所長 田中耕司）

白石教授が今春退職

政策研究大学院大学へ



今春、白石隆教授が政策研究大学院大学へ異動されました。1996年7月に東南アジア研究センターに着任されてから2005年3月までの8年10カ月間、世界に

おける東南アジア研究の牽引役として、また本研究所運営の中心的存在としてご活躍いただきました。

白石教授は、1972年に東京大学教養学部卒業後、1986年にコーネル大学で哲学博士号を取得されました。1975年に東京大学東洋文化研究所助手、1979年には同大学教養学部助教授、1987年からはコーネル大学助教授、1996年には同大学教授としてご活躍されました。そして、1996年に東南アジア研究センター教授に着任されました。

白石教授の研究関心は幅広く、その成果は東南

アジア研究者、アジア研究者が広く知るところとなっています。インドネシア政治史研究でいえば、20世紀初めのインドネシアの政治を描いた *An Age in Motion*、インドネシア現代政治研究では『インドネシア 国家と政治』『スカルノとスハルト』が代表的作品となります。その後、白石教授の知的関心は東南アジア地域、東アジア地域の成り立ちに向かい、その成果の一つは『海の帝国』という書籍として結実しました。

3月24日、研究所コロキウムで“Area Studies Reconsidered”というテーマで最終講義をされた後、京大会館において送別会が行われました。白石教授が指導されていた大学院生によるユーモアに富んだお礼の言葉などもあり、ほがらかな送別会となりました。これまでの東南アジア研究所でのご尽力に感謝すると同時に、新しい職場である政策研究大学院大学でのご活躍を心より祈念いたします。

(文責：岡本正明)

東南アジア研究所を

去るにあたって

白石 隆

2005年3月末日で京都大学東南アジア研究所を辞し、4月1日から東京にある政策研究大学院大学に移ることになった。1996年7月からの8年余、振り返ってみると、東南アジア研究所ほど研究環境の良かったところはなく、いくつか非常に感慨深いことがある。

その一つは、わたし自身の問題関心が、東南ア研時代に、インドネシア政治・政治史研究から東アジア地域形成研究へと大きく変化し、『海の帝国』(2000年)、『帝国とその限界』(2004年)、*Beyond Japan* (Peter J. Katzenstein との共編著、2006年、コーネル大学出版会から出版予定)などの研究をまとめることができたことである。ただし、このことは、東南アジア政治の比較分析に対する関心を失ったと

いうことではなく、いずれは「東南アジア近代国家のマクロ比較史」について一書をまとめた。

もう一つは、COE (アジア・アフリカにおける地域編成) プロジェクト、さらには日タイ拠点交流事業、科研プロジェクトとして「ヘゲモニー」「テクノクラシー」「ウォーラセア海域における生活世界と境界管理」「インドネシアの地方エリートの社会学的プロフィール」「老いのセーフティ・ネット」「東アジア地域形成と中産階級」など、多くの共同研究で、東南ア研の同僚、その他の人たちから実にいろいろなことを学ぶことができたことである。その成果の一部はすでに、*After the Crisis* (Patricio N. Abinales との共編著、2005年) のようなかたちで出版されているが、これからも特に「セーフティ・ネット」「中産階級」「インドネシア政治エリートの社会学的分析」などについて共同研究を続けていければと思う。

「参加型農村開発行政支援」プロジェクトが 第1回 JICA 賞受賞

当研究所を中心に活動してきた「参加型農村開発行政支援」プロジェクト（PRDP-I Participatory Rural Development Project 2000–2003）が、第1回 JICA 賞を受賞した。このプロジェクトは海田能宏教授（現在京都大学名誉教授）のリーダーシップにより、当研究所が国際協力機構（JICA）との協同事業として1986年以来継続実施しているバングラデシュ農村開発実践研究の第Ⅲフェーズにあたる。

この賞は2004年10月1日の新生 JICA 1周年を記念して設けられた。2004年12月7日に、PRDP プロジェクト実施責任省庁であるバングラデシュ政府地方自治・農村開発ならびに協同組合省大臣 Mannan Bhiyan に対して賞状授与式があり、現在 JICA 長期派遣専門家として PRDP-II 開始準備のためにダッカ在住の海田名誉教授も出席された。なお、この賞は1974年以来バングラデシュで活躍している NGO シャプラニールの類似プロジェクトとの合同受賞である。JICA 賞は個人やグループではなく、



プロジェクトそのものが対象となっており、長年の地道な研究によって得られた地域と社会に対する深い洞察を、実践的な政府のプロジェクトに結びつけ、大きな成果を得たことが受賞理由として挙げられている。

授賞式の模様はバングラデシュのテレビ、新聞で取り上げられた。本受賞は、近年増加傾向にある「現地にコミットする当事者性を意識した実践的地域研究」を目指そうとしている学生や研究者を元気づけ、地域研究の一つの方向性を明確に示す成果として意義深いと言える。（文責：安藤和雄）

FIVE YEARS IN KYOTO

By Xianfeng Song



The Center for Southeast Asian Studies (CSEAS) is well known for its top-level academic atmosphere, famous scholars, and strong international connections. With all these advantages, I finished a series of works and obtained extensive experience with web GIS and spatial databases. What is more, I developed international relationships throughout the world, which will continue to benefit my career after I return to China.

I also have to mention that CSEAS is famous for its integrated area studies crossing disciplinary boundaries. I was deeply attracted by the history lectures given by international scholars. They introduced me to many basic concepts, such as British and French colonialism in Asia, the geographic concept of Indochina, the flourishing opium trade, and even pumpkin migration routes from America and Southeast Asia to Japan. Moreover, I was able to make linkages and find answers to many questions I had as a middle school student, for example, about the international context of the Opium War between China and

the British and French.

Regarding my personal achievement in daily life, I would like to say that Kyoto and Japan presented me with great opportunities to experience mountains, cherry flowers and temples, traditional festivals, and delicious food. My wife and I visited nearly all the famous temples in Kyoto, like Kinkaku-ji, Ginkaku-ji, and Byodoin in Uji, some in Osaka and Nara, and Disney Land in Tokyo as well. Of all of the traditional festivals, Gion festival and Mt. Daimonji in Kyoto impressed us most. We also found Japanese cuisine very unique and impressive. Sashimi, sushi, and tempura are my wife's favorite dishes at the plentiful Japanese Ryori.

Another pleasant thing I am glad to share is that Kyoto presented me with the two most wonderful gifts in the world—two baby boys, something that cannot happen in China for the time being.

Finally, I would like to express my great gratitude to CSEAS for hosting me for five years. My particular thanks should be given to my counterparts, Tanaka-sensei, Kono-sensei, and Shibayama-sensei, for their solid support and constant assistance. (Research Associate, May 2004–March 2005)

京都大学・アジア工科大学（タイ）間で初めての双方向ビデオ会議
第1回地域情報学シンポジウム「地域研究における GIS/RS の可能性」開催

2005年3月24日、当研究所、地域研究コンソーシアム、ならびに地域情報学研究会主催による第1回地域情報学シンポジウム「地域研究における GIS/RS の可能性」(First International Symposium on Area Informatics 2005 : Potential of GIS/RS in Area Studies) が開催された。本シンポジウムは、アジア工科大学（タイ）・京都大学学術情報メディアセンター（ともに共催機関）の2会場をインターネットを介した双方向ビデオ会議システムで接続した2元中継で行われた。日本側86名、タイ側16名の計102名が参加し、GIS/RS(Remote Sensing) の地域研究における応用について熱心な討論が行われた。

当日は、開会挨拶及び趣旨説明に続き、第1セッション（日本語）では、奥田敏統氏（国立環境研究所）の「自然生態・環境とGISの可能性」ほか2件の報告とコメントが行われた。引き続き第2セッション（英語）では、田中耕司当研究所所長、タイ国GISTDA 所長 Darasri Dowreang 氏などの挨拶に続き、Caverlee Cary 氏（カリフォルニア大学バークレイ校



GISセンター)の“Possibility of GIS/RS Technology in Historical Studies and Mapping”ほか5件の報告とコメントが行われた。初めての2元中継の実証実験を兼ねたシンポジウムはスムーズに進み、好評であった。次回シンポジウムや研究会開催に期待する声も出されている。

(文責：柴山 守)

地域研究コンソーシアムが設立されてまもなく1年が経過する。2005年3月時点で加盟組織は63に達した。理事会、運営委員会のもと、研究企画交流、情報ネットワーク、出版・広報、教育・次世代育成の4部会と情報資源共有化、地域情報学、社会連携の3研究会が組織され、活発な活動を展開している。これまでに、統合地域研究の展開（アンブレラ・

地域研究コンソーシアム
活動報告



プログラムの実施や交流支援、加盟組織の行う研究活動の情報交換・広報など)と社会への知的貢献(ホームページ、メール・マガジン、ニューズレターの発行、移動公開講座など)に関して具体的な活動に着手した。これらの詳しい内容についてはホームページ (<http://www.jcas.jp>) をご覧いただきたい。設立2年目に当たる今年度は、加盟組織をつなぐインタラクティブな活動の活性化、バーチャル空間における情報交流・情報発信の活性化、大学院生主体のワークショップの開催を通じた教育関連活動の強化、研究・教育機関とNGO/NPOとの人的交流による社会連携活動の強化などに重点を置く予定である。当研究所は、拠点組織としてこれらの活動を担うとともに、地域を越えた地域研究の展開や社会連携、次世代育成のインターフェースとして地域研究コンソーシアムを活用して、地域研究のリニューアルを先導する。

(文責：河野泰之)

人 事

教員人事

<昇任>

速水洋子社会文化相關研究部門助教授は2005年4月1日付け、教授に昇任。

<国内客員部門>

任期 2005年4月1日～2006年3月31日。

白石 隆教授

1996年7月～2005年3月京都大学東南アジア研究所（センター）教授。同年4月政策研究大学院大学教授。

百瀬邦泰助教授

1992年京都大学理学部卒業。
98年1月同大学院理学研究科植物学専攻博士後期課程修了、
京都大学博士号（理学）取得。
同年4月東南アジア研究センター助手、同月京都大学大学院

院アジア・アフリカ地域研究研究科助手に配置換。

2003年愛媛大学農学部助教授。

[主要論文]

Ecological Factors of the Recently Expanding Style of Shifting Cultivation in Southeast Asian Subtropical Areas: Why Could Fallow Periods Be Shortened? *Southeast Asian Studies* 40(2), 2002. ▽『熱帯雨林を観る』講談社選書メチエ 276, 2003. ▽ Plant Reproductive Interval and Population Density in Aseasonal Tropics. *Ecological Research* 19, 2004.

加藤元センター教授が退職

1979年から98年まで東南アジア研究センターに在籍された加藤剛大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授が3月末日で退職、4月龍谷大学社会学部教授に就任されました。加藤教授は、1979年京都大学東南アジア研究センターに助教授として着任。91年教授に昇任。98年同研究科の発足とともに東南アジア地域研究専攻地域進化論講座教授に就任。2002年4月から2年間同研究科長。3月17日、京大会館において最終講義ならびに退職記念祝賀会が開催され、同研究科と当研究所の教職員・学生がこれまでのご尽力に感謝し、別れを惜しまました。

外国人研究者人事

■外国人研究員

Viriya Limpinuntana (タイ)。コンケン大学農学部准教授。招へい期間 2004年12月1日～2005年5月31日。研究題目「タイ国東北部の水稲作の変容と将来」

Nelwaty Sikumbang (インドネシア)。インドネシア国立図書館司書・コレクション構築課長。2004年12月17日～2005年6月16日。「東南アジア研究所図書室における収書と図書館サービスの考察」

Surat Lertlum (タイ)。タイ王立チュラチョムクラオ防衛大学校数理・情報科学科プログラム主任。2005年1月5日～7月4日。「東南アジア地域文化遺産地図形成」

Somluckrat Grandstaff (タイ)。マヒドン大学環境資源学部大学院コース・研究員。2005年3月1日～8月31日。「東北タイ農村部における人々の適応戦略の変容」

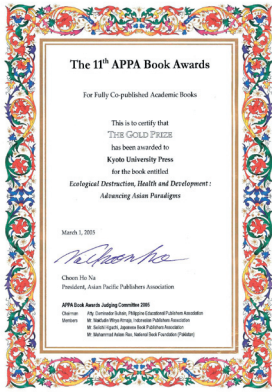


Pinit Lapthananon (タイ)。チュラロンコン大学社会科学研究所主任研究員。2005年4月1日～2006年3月31日。「東北タイにおける開発僧の役割と社会変化」



退職記念祝賀会で東南アジア研究所
所員とともに

英文地域研究叢書 *Ecological Destruction, Health, and Development* が、第 11 回 APPA 出版賞・学術部門で金賞を受賞



古川久雄他編 *Ecological Destruction, Health, and Development: Advancing Asian Paradigms* (Kyoto Area Studies on Asia, Vol.8) が、第 11 回 APPA 出版賞・学術部門で金賞を受賞した。APPA、Asian Pacific Publishers Association (アジア太平洋出版連合) は、

国際出版連合 (IPA) の下部組織として、アジア太平洋地域各国の出版社団体によって構成されており、日本は日本書籍出版協会が加盟している。本賞は、アジア太平洋諸国間の共同出版を奨励するために設けられた賞で、学術書、児童書、文学・一般書の三部門で、金・銀・銅それぞれ 1 点が毎年選ばれてい

る。今回の受賞は、本書の多分野横断的な新しい試みは言うにおよばず、京都大学学術出版会と Trans Pacific Press (オーストラリア) による学術書共同出版の取り組みが高く評価されたものである。

授賞式は、3 月 22 日、東京新宿の日本書籍出版協会で行われ、京都大学学術出版会の鈴木哲也氏が出席した。

安場元センター教授逝去

東南アジア研究センターの発展初期の 1969-80 年に、教授としてご活躍された安場保吉・大阪学院大学教授が、去る 4 月 13 日、74 歳で亡くなられた。経済発展論、比較経済史、東南アジア経済論などの分野で傑出した業績をあげ、センターの発展に貢献された方を失った。つい最近まで意欲的に研究と執筆活動に没頭されていた先生を偲び、心から哀悼の意を表したい。

4 月 16 日に営まれた葬儀では、友人代表として市村眞一元センター所長の懇ろな弔辞が捧げられた。

■招へい外国人学者

Satoshi Ikeda (アメリカ合衆国)。カナダ・アルベルタ大学社会学部準教授。2004 年 12 月 1 日～2005 年 11 月 30 日。「世界システム論から見たアジア地域変動に関する研究」

Phuangthip Bhoopong (タイ)。ソクラ大学理学研究科博士課程大学院生。2004 年 12 月 6 日～2005 年 12 月 5 日。「タイ南部における腸管感染症原因細菌の解析」

Ju Lan Thung (インドネシア)。LIPI 首席研究員。2005 年 1 月 14 日～2 月 16 日。「インドネシアと日本の華人系社会の比較研究——神戸の事例に見る日本の華人政策」

Siti Sugiah Mughahneisyah (インドネシア)。ボゴール農業大学農学部社会経済学科講師。2005 年 2 月 2 日～5 月 1 日。「ジェンダー・農家世帯の生存戦略・貧困——西ジャワ農村における持続可能農業発展」

Aroonrut Wichienkiew (タイ)。チェンマイ・ラーチャパット大学講師。2005 年 3 月 20 日～4 月 19 日。「タイ語三印法典テキスト及びデータベース構築」

Pasuk Phongpaichit (タイ)。チュラロンコン大学経済学部教授。2005 年 3 月 21 日～4 月 1 日。「危機以降のタイにおける資本の構造とダイナミズム」

Chan Chee Khoo (マレーシア)。マレーシア大学社会科学部助教授。2005 年 4 月 1 日～9 月 30 日。「高齢者に関する疫学研究」

Prangtip Daorueng (タイ)。インタープレスサービス記者。2005 年 4 月 10 日～5 月 11 日。「平和の仲介——東南アジアにおける平和プロセスと調停者の役割、その成否」

■外国人共同研究者

Herry Yogaswara (インドネシア)。LIPI 人口問題研究所研究員。2005 年 1 月 10 日～2 月 8 日。「インドネシアにおける国境地帯——制度的ネットワークに関する日本研究者からの教訓」

Terry Grandstaff (アメリカ合衆国)。リサーチコンサルタント。2005 年 3 月 1 日～8 月 31 日。「土地利用及び天然資源管理問題に関しての農村社会と環境の変遷」

COLLOQUIA

◎ “From Borneo to the Russian Far East: The Place of Timber in Global Ethnography” by *Ishikawa Noboru*, November 25, 2004.

In 2000 I began research on riverine communities along the Kemena River in Northern Sarawak, Malaysia. This area incorporates not only upriver Dayak communities, but also downriver timber-related industries where local and Indonesian labor is marshalled for massive, export-oriented production. By tracking the metamorphosis of wood from logs to plywood sheets and sawn timber, I explore the long journey of trees from the Bornean tropical forest to the living rooms of Japanese houses. Focusing on commodity chains enables us to look into both production and consumption sites, as well as the political economy and cultural construction surrounding trees, wood, and timber. Such a multi-focal approach will ultimately lead to a global ethnography of timber that encompasses Southeast Asia, East Asia, the Russian Far East and beyond.

◎ “The Expansion of Maize Cultivation and Its Impact on Village Economy in Northern Laos” by *Tomita Shinsuke*, December 24, 2004.

Agriculture in the northern montane areas of Laos is currently undergoing transition. The livelihood of farmers is changing from one based on shifting cultivation to one based on commercial cash cropping. Where such a transition is commonplace, various infiltration patterns of cash crop cultivation can be observed. In my presentation, I examined the socio-economic factors and land use change behind this cash crop expansion. Government support and lower production costs have contributed to the expansion of maize production. DAFO and agriculture promotion bank have loaned maize seed to farmers at a low interest rate, and maize crops have been exempted from customs taxation at the Lao-China border. Lower production costs mainly arise from richer soil fertility and gently-sloped land in research site compared to those in China. Finally, farmers themselves have adopted economic change by diversifying their cropping systems. These factors make maize produced in Laos highly competitive in the Chinese market.

◎ “Local Politics in Decentralized Indonesia: The Governor General of Banten Province” by *Okamoto Masaaki*, January 27, 2005.

Democratization and decentralization have changed the

local political landscape in Indonesia, making local politics one of the most important topics for research today. This colloquium inquires into the state of post-authoritarian local politics in the Banten area, focusing on provincial government and related economic and political resources. The tentative findings are that one local boss (or culturally recognized thug) and his followers are so dominant that he can boast of being the “governor general” of Banten province or, more abstractly, a strong semi-social force has captured the local state.

◎ “Open Source Solutions for Geo-Informatics at CSEAS” by *Xianfeng Song*, February 24, 2005.

The Free/libre and Open Source GIS Software is growing in popularity within the geo-informatics community. Free software such as Isite, Geoserver, Minnesota Mapserver, PostgreSQL/PostGIS, GRASS GIS, and GDAL/OGR are gaining strong momentum by offering a technically competitive and open-source alternative to proprietary software. This colloquium introduced several interesting Web GIS projects carried out at CSEAS which use such Open Source Software quite extensively. Although the projects vary from the Southeast Asian Topographic Map Atlas and Environmental Cambodia to Cambodian Gazetteer, the adopted methodology can be applied elsewhere for similar processes.

<来訪者>

2004年11月16日 Shu Fukai (クイーンズランド大学農学部教授) ▼ 11月30日 Ricardo De Ungria (フィリピン大学ミンダナオ校学長) ▼ 同日 Cam Trong (ハノイ国家大学ベトナム研究所教授)、Do Bang (フエ大学文学部史学科助教授) ▼ 12月11日 Guy F. Trebuil (チュラロンコン大学 CU-CIRAD プロジェクトディレクター、Ingon Patamadit-Trebuil (同コンサルタント) ▼ 12月15日 Misael L. Racines (SEASREP マニラ事務局プログラマー) ▼ 2005年2月18日 Ma Shizhuang (中国科学院研究生院・副学長・教授) 他2名 ▼ 3月22日 Surapon Nitikraipot (タマサート大学学長) 他2名 ▼ 3月23日 Caverlee Cary (カリフォルニア大学バークレー校 GIS センター研究員) ▼ 3月25日 Philippe Peycam (クメール研究センター所長)

35年ぶりの再訪、タイ

瀬戸口烈司



2003年に、35年ぶりにタイを再訪した。東南アジア研究センターの助手だった1968年にタイで調査をおこなってから、じつに35年がたっていた。その間、タイには行っていない。

タイで調査した後の1970年に、私は関西経

済研究センターの委任経理金によってアメリカのカンザス大学に留学した。アメリカに居着いて学位を取り、その後は霊長類研究所に職を得ておもに南米で調査をつづけていたので、東南アジアとは疎遠になっていた。

2003年から理学研究科も中心のひとつになっている21世紀COEプログラム「活地球圏——アジア・オセアニアからの発信」がスタートした。教育プログラムの一環で、タイのチュラロンコーン大学の理学部地質学教室でCOE連続講義を開講することになった。1968年当時、チュラの地質学教室から調査許可の同意を得ていたこともあったので、私もCOE連続講義の担当者に名乗り出た。

35年ぶりにバンコクに到着した。タイ文字はすっかり忘れてしまって、読めなかった。35年前はバスで国内を旅行したので、行き先表示を読む必要から地名は不自由なく読めるようになっていた。35年という時間は、読める力を失わせるのにじゅうぶんであったようだ。さっぱり思い出せないのである。

ドムアン空港から、タクシーで市内のホテルに向かった。5つ星クラスのホテルを予約しておいたので、タクシーの運転手も知っているだろうと思って声をかけておどろいた。「ルーチャクマイ？ ××ホテル」とタイ語がなめらかに出てきたのである。「知っているか？」という意味だ。35年前、タクシーに乗ったときいつも運転手に問いかけていたこと

ばが、フラッシュ・バックしてきたのだろう。これには、われながら、おどろいた。タイ語は、まったく忘れてしまっていたからである。思い出すとは、考えてもいなかった。運転手が「ルーチャク（知っている）」と答えたことも、しっかりと理解できた。相手がしゃべったことばがわかったことの方が、私にはうれしかった。数字もすぐに思い出した。

35年前の1968年は、26歳のときだった。語学に堪能ではない私は、タイ語の覚えもよくなかった。それでも国内を旅行するのに不自由しない程度に、タイ語には慣れていた。その後、タイ語に接する機会がまったくなかったのも、すっかり忘れていた。それが、かたことながらフラッシュ・バックしてきたのである。

チュラロンコーン大学の地質学教室を訪れた。教室の教官たちと顔合わせをした。35年前とは、顔ぶれはすっかり替わっていた。当然である。それでも、35年前にチュラの地質学教室の方々と親交があったことを紹介し、当時の教官群の名前をならべてみた。ふたたび、おどろいた。ベーザー、ティワ、サイヤン、ウィロート、ナロン、ワルニーと、なめらかに名前を思い出したのである。その後ナロンとワルニーとは京都で会ったことはあるが、その他の人とはまったく会う機会がなかった。なのに、名前がすらすらと思い出せたのである。

これが若さの力というものなのだろう。それから海外で調査をする機会はずいぶんあったが、外国人研究者の名前をおぼえるのは、いつもたいへんである。おぼえたつもりでも、すぐに忘れる。

タイでのフラッシュ・バックは、私には新鮮なおどろきであった。私にも、けっこう才能があったのだ。その才能が花咲いたと思えないのが残念ではあるが。

(1967～1973年 東南アジア研究センター助手。
現在、京都大学大学院理学研究科教授)

海外疾病だより *Getting Sick Here and There*

山本麻起子

語学研修兼調査研究で中国雲南省昆明市に2003年9月～2004年11月の1年強滞在した。この間現地で4回も病院のお世話になったので、不名誉な話であるが、そのときの経験をこの疾病便りに書かせていただくことになった。1回目は滞在1カ月が過ぎた頃、高熱を伴う風邪に見舞われた時。2回目は足首をひねった時、3回目は初めての調査で風邪を拗らせ肺炎にかかり、さらに喘息になりかけた。4回目は滞在1年が過ぎ帰国1週間前に急性腎盂炎にかかった。この4回の病気の合間は、休むことなく風邪をひいていた。

風邪が慢性化したのは環境や食生活の変化が原因だったようで、初めに高熱を出してから、その後半年間は度々微熱を伴う風邪を引くようになった。調査地から昆明市に戻った時は深い咳と微熱が続き、1カ月後には肺に痛みを感じた。病院でレントゲン検査をした結果、肺に影ができていて、2日間通院してブドウ糖の点滴を受けた。一時帰国後に京大病院に検査に行ったところ、SARS患者扱いで隔離されたが、1時間でその疑いは晴れた。しかし呼吸器

科では、今回の咳が悪化して喘息を引き起こした可能性がある」と診断された。気管支拡張薬などをもらい、薬の効能もあって2週間で深い咳は治まった。

次に、急性腎盂炎である。ある日曜の朝、腹痛がありそのうちに頻尿感が感じられた。排尿後には痛みや残尿感があり、しだいに激しい腰痛を伴うようになった。日曜日でも診察してくれる赤十字病院の泌尿器科に行き、尿検査をした後3日間通院して点滴を受けた。薬は出されず、水分を取り細菌を流すことが一番だと言われた。点滴をした一日目の夜、38度以上の発熱があったが、熱が下がると体が楽になっていった。その後残尿感がしばらく残ったが、帰国して再度検査すると完治していた。主治医から38度以上の発熱が伴ったこと、激しい腰痛があったことから膀胱炎ではなく急性腎盂炎であったと診断された。普段から膀胱には細菌が存在するものの、ストレスなどで抵抗力がなくなったときかかりやすい病気だと言われる。

現地で病気にかかったとき一番助けになるのは、病状の相談ができ、病院などを紹介してくれる同性の知人だった。また一時帰国中には、少しでもおかしいと思うところをすべて検査して調査に戻ったほうがよい。その時は主治医の先生と連絡がとれる様に、連絡先を教えてもらってからフィールドに帰ることをお勧めしたい。(ASAFAS院生)

Dr's Comment (松林公蔵)

山本さんの疾病だよりにコメントさせていただきます。

雲南省の省都昆明は、年間にわたって気候温和なため春城ともいわれますが、日本人にとっては中途半端な気温で油断しやすい気候かも知れません。肺に影がでる「肺炎」は、体力低下やストレスなどに風邪が加わって発症しますが、通常、入院して抗生剤点滴療法を行ったほうが無難です。高齢者の場合は生死にかかわりますが、山本さんの若さと楽観性で無事のりきった模様です。「尿」は本来「清潔」なもので通常無菌です。尿路から菌が逆流して起こる炎症は、尿路が短いために女性に多いのですが、膀胱炎では頻尿、排尿痛、残尿感のみ、炎症が腎臓におよぶ急性腎盂炎では高熱と腰痛が加わります。抗菌薬クラビット2錠(朝夕)と鎮痛解熱薬ロキソニン3錠(毎食後1錠)と飲水で1週間以内に治り

ます。上記2薬は、常にフィールドに携行することをお勧めします。フィールドで病気になった場合、メールで連絡いただければサジェスションが可能です。(研究所教授)

事務員人事 (4月1日付)

- 福本穂事務長は、理学研究科等事務長に配置換。後任に森川進研究・国際部研究協力課課長補佐。
- 小柳吉邦会計掛員は、人事部人事課統括人事掛(文部科学省研修生)「初等中等教育局初等中等教育企画課教育制度改革室企画調査係」。後任に中西正直国立曽爾少年自然の家事業企画課企画係員。

◇『東南アジア研究』42巻3号

Southeast Asian Studies 42(3)

The Evolutionary Changes in Rice-crop Farming: Integrated Pest Management in Indonesia, Cambodia, and Vietnam. Yunita T. Winarto ▼ Recent Changes in the Composite Swidden Farming System of a Da Bac Tay Ethnic Minority Community in Vietnam's Northern Mountain Region. Nguyen Thanh Lam, Aran Patanothai, and A. Terry Rambo ▼ 「ゴムが変えた盆地世界——雲南・西双版纳の漢族移民とその周辺」深尾葉子 ▼ 「カンボジア国除隊兵士の人口学・疫学的調査結果に関する一考察」東佳史 ▼ 「野生動植物採集と公共林野利用——タイ王国東北部ロイエット県の天水稲作農村の事例」芝原真紀 ▼ 書評(Book Review) Peter Burns. *The Leiden Legacy: Concepts of Law in Indonesia*. 新地真之 ▼ 現地通信 (Field Reports) 「ラオス村落信用組合考」藤田幸一 ▼ 「インドネシアにおける読書推進運動の可能性と情報共有のあり方」北村由美

◇『東南アジア研究』42巻4号

Southeast Asian Studies 42(4)

New Japanese Scholarship in Cambodian Studies
Introduction. Hayashi Yukio ▼ *Kampot of the Belle Époque: From the Outlet of Cambodia to a Colonial Resort*. Kitagawa Takako ▼ Post/colonial Discourses on the Cambodian Court Dance. Sasagawa Hideo ▼ Marriage, Gender, and Labor: Female-Headed Households in a Rural Cambodian Village. Takahashi Miwa ▼ The Relationship of Socio-Economic Environment and Ethnicity to Student Career Development in Contemporary Cambodia: A Case Study of High Schools in Phnom Penh. Sakanashi Yukiko ▼ An Ethnographic Study on the Reconstruction of Buddhist Practice in Two Cambodian Temples: With the Special Reference to Buddhist *Samay* and *Boran*. Kobayashi Satoru

Impact of Economic Liberalization on Rice Intensification, Agricultural Diversification, and Rural Livelihoods in the Mekong Delta, Vietnam. Jean-François Le Coq and Guy Trebil

◇地域研究叢書 15-16 (京都大学学術出版会刊)

■ 信田敏宏. 2004. 『周縁を生きる人びと——オラン・アスリの開発とイスラーム化』

■ 藤田幸一. 2005. 『バングラデシュ 農村開発のなかの階層変動——貧困削減のための基礎研究』

◇ *Kyoto Area Studies on Asia*, Vols.9-12. (Kyoto University Press & Trans Pacific Press 共同出版)

■ A.Terry Rambo. 2005. *Searching for Vietnam: Selected Writings on Vietnamese Culture and Society*.

■ Kakizaki Ichiro. 2005. *Laying the Tracks: The Thai Economy and its Railways 1885-1935*.

■ Shiraishi Takashi and Patricio N. Abinales, eds. 2005. *After the Crisis: Hegemony, Technocracy and Governance in Southeast Asia*.

■ Patricio N. Abinales, Ishikawa Noboru, and Tanabe Akio, eds. 2005. *Dislocating Nation-States: Globalization in Asia and Africa*.

◇研究報告書シリーズ (Research Report Series)

■ No.103. Pornpimol Manochai. 2004. *Isan Information in CSEAS Library, Kyoto University*.

■ No.104. 2004. *Middle Classes in East Asia: Proceedings of the JSPS and NRCT Core University Program Workshop*.

■ No.105. 2004. *Flows and Movements in East Asia: Proceedings of the JSPS and NRCT Core University Program Workshop*.

■ No.106. 2005. 『地域研究における GIS/RS の可能性 (Potential of GIS/RS in Area Studies: Proceedings of First International Symposium on Area Informatics 2005)』

2004年度は地域研究叢書が2冊、英文地域研究叢書 *Kyoto Area Studies on Asia* が4冊刊行された。そのうち英文の2冊、*After the Crisis* と *Dislocating Nation-States* は、それぞれ JSPS 拠点大学プログラムワークショップ “Hegemony, Technocracy and Networks” と COE プロジェクト



国際会議 “Regions in Globalization” での発表論文を基に編まれた編著である。その他の単著は著者が自分のフィールドとする地域で長年調査

し、その地域の中から生まれ、地域の中で考察を重ねた研究成果を世に問う意欲作である。

購入を希望される場合は、京都大学学術出版会まで。(電話 075-761-6182, e-mail: sales@kyoto-up.gr.jp)

オンラインジャーナル *Kyoto Review of Southeast Asia* Issue 6: Elections and Statesmen が2005年3月に刊行されました。 <http://kyotoreview.cseas.kyoto-u.ac.jp/>

◆ “JSPS Core University Program Seminar”

Emilia Yustiningrum Munahar (Research Center for Politics, LIPI) “The Emergence of Middle Class as Local Elite in Yogyakarta: Between Tradition and Modernity,” November 26.

▼ Chalongphob Sussangkarn (TDRI) “The Emergence of China and ASEAN Revitalization,” February 21. ▼ Bhanupong Nidhapiraba (Thammasat University) “Dynamism of the Thai Agriculture,” February 28. ▼ Suthiphand Chirativat (Chulalongkorn University) “FTA Development in Asia and Thailand,” March 22.

◆ Special Seminar

Claudio Delang (Visiting Project Researcher, CSEAS) with comments by Nathan Badenoch “Karen and Hmong Adaptation to Economic Changes in Northern Thailand,” November 29. ▼ Thung Ju-Lan (LIPI) “A Cross-Regional Comparison between Chinese Minority in Indonesia and Chinese Minority in Japan: Host Countries Policy toward the Chinese, with a Case Study at Kobe,” February 8. ▼ Pasuk Phongpaichit (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Democracy and Populism in Thailand in Global Perspective,” February 18. ▼ Claudio Delang (Visiting Project Researcher, CSEAS) “Forestland Classification for Swiddening and NTFPs: The Case of the Pwo Karen in Thung Yai Naresuan Wildlife Sanctuary, Thailand,” April 25.

◆ 「東南アジアの自然と農業」研究会

118 回例会：12 月 10 日 田中壮太（高知大学）「マレーシア・サラワク州における実験焼畑」▼ 119 回例会：2 月 16 日 大西秀之（総合地球環境学研究所）「メコン河流域における生物資源の利用と市場経済の影響」

◆ 「東南アジアの社会と文化」研究会

第 20 回例会：11 月 19 日 飯田淳子（川崎医療短期大学）「伝統医療の『復興』とローカルな実践——北タイ農村におけるタイ・マッサージの受容」▼ 第 21 回例会：1 月 21 日 中川敏（大阪大学）「妖術師と正義論」▼ 第 22 回例会：3 月 25 日 吉本忍（国立民族学博物館）「テキスタイルに見る東南アジアの特殊性と普遍性」

◆ 「国家・市場・共同体」研究会

3 月 7 日 矢倉研二（京都大学）「カンボジア農村における貧困滞留と経済格差拡大に関する実証研究」
3 月 9 日 「東南アジア研究のフロンティア」（日本比較政治学会東南アジア政治コーカス関西例会との共催）
津田浩司（東京大学）「98 年危機と『影の華人組織』—

—ジャワ地方小都市における『華人性』のひとつの現れ方」▼ 中島健太（名古屋大学）「ポスト・スハルト期の紛争対策タスクフォース——インドネシアにおける非常事態法制とその運用」▼ 信田敏宏（国立民族学博物館）「抵抗する周縁——マレーシア、オラン・アスリ社会におけるイスラーム化」▼ 藤田渡（総合地球環境学研究所）「住民主体の森林管理」をめぐる政治社会過程——タイを中心に」

3 月 31 日 北村恵子（名古屋大学）「インドネシアにおけるイスラーム式（シャリーア）小規模金融——ジョクジャカルタ特別州におけるシャリーア村落金融組合バイトウル・マール・ワッ・タムウィル（Baitul maal wat Tamwil: BMT）の普及から」

▼ Goh Pek Chen (Visiting Researcher, CSEAS) “Intellectual Capital in Malaysian Semiconductor Industry,” April 19.

◆ 「タイ・バンコク」研究会

1 月 8 日 岩城考信（法政大学）「水の都・バンコクにおける郊外住宅地開発——1890 から 1930 年代におけるバーンラック地区とドゥシット地区を中心に」▼ 礪波亜希（京都大学）「アジア太平洋の環境紛争——全体像および国連開発計画の方向性」▼ 2 月 24 日 佐々木創（北海道大学）「在タイ日系メーカーが直面する産業廃棄物管理の課題——工場法改正とケーススタディから見る対策」▼ 山口健介（東京大学）「資源紛争の政治性——北タイ水紛争を事例に」▼ 4 月 19 日 水谷光一（NPO「人間環境ネット 21」）「津波被災地からの報告——各セクター支援の現状と被災地としての位置づけ」▼ 市野澤潤平（東京大学）「プーケット島のバトンビーチにおける＜風評被害＞——津波災害の観光産業への影響」

◆ 「農村開発における地域性」研究会

第 13 回例会「生活・暮らしの基層」
3 月 28 日 下澤巖（NPO「ジュマネット」）「チッタゴン丘陵の政治と平和の現状」▼ 佐藤宏（東京外国語大学）「アッサムへのモスリムベンガル移民」

◆ 「トランス・ディシプリン」研究会

「東南アジアにおける『山地 vs. 平野』の構造的理解をめざして」

3 月 15 日 ディスカッション：田中耕司、河野泰之、速水洋子、石川登（CSEAS）、祖田亮次（北海道大学）横山智（熊本大学）、高倉浩樹（東北大学東北アジア研究センター）、市川昌広（総合地球環境学研究所）

2004 年度に受入れた大型資料

統計資料

- ▶ タイ 農業関係統計各種 (1990-2003)
各省庁統計 (2000 年以降)
- ▶ インドネシア 継続購入統計各種
- ▶ フィリピン フィリピン国勢調査 (2000)
- ▶ International Population Census (マイクロ資料)
バングラデシュ国勢調査 (1986) △ビルマ国勢
調査 (1983) △マレーシア国勢調査 (1991)
△タイ国勢調査 (1970・1990)

図書

- ▶ アジア
- 『20 世紀日本のアジア関係重要研究資料』
第 3 部 第 2 期 龍溪書舎 (2003)
大東亜戦争前後の外地で刊行された邦文単行図書資
料の復刻中心。南洋華僑、南洋協会関係資料を含む。
- 『アジア・アフリカ文献調査報告』
アジア・アフリカ文献調査委員会 (1964)

コレクション

- ▶ インドネシア
Sidharta Collection of Indonesian Chinese (*peranakan*)
Literature (マイクロ資料)

◆ 「東南アジア大陸山地部」研究会

第 13 回例会: 3 月 25 日 谷祐可子 (東北学院大学) 「ミ
ャンマー・サガイン管区におけるウルシ樹液採取者の社
会・経済的特徴について」

◆ 「環ヒマラヤ広域圏における社会と生態資源変容の地
域間比較」研究会

3 月 29 日 月原敏博 (福井大学) 「ヒマラヤ・チベット
の文化地理——人間地生態史の観点から」

◆ 「近畿熱帯医学」研究会

第 7 回: 12 月 4 日 高崎智彦 (国立感染症研究所) 「わ
が国におけるアルボウイルス感染症の現状」▽黒澤八重
(ペンタックス株式会社) 「ハイドロキシアパタイトー
ナイロン複合ビーズを用いた抗 Dengue ウイルス IgM の検
出」▽高木正洋 (長崎大学熱帯医学研究所) 「疾病媒介
蚊のいる景色」

当研究所が提供 (共同提供) または技術支援している主
な情報発信サイトを紹介します。

21 世紀 COE プログラム

<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/>

拠点大学交流事業 (CORE)

<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/core/>

地形図画像データベース

<http://aris.cseas.kyoto-u.ac.jp>

フォトライブラリー

<http://photolib.cseas.kyoto-u.ac.jp>

地図・衛星画像

<http://coe.asafas.kyoto-u.ac.jp/map/cgi-bin/map.cgi>

タイ語文献データベース

<http://library.cseas.kyoto-u.ac.jp/cseas/>

Kyoto Review of Southeast Asia

<http://kyotoreview.cseas.kyoto-u.ac.jp/>

東南アジアの自然と農業研究会

<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/seana/>

東南アジアの社会と文化研究会

[http://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/kenkyuukatsudou/
syakai-bunka/](http://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/kenkyuukatsudou/syakai-bunka/)

東南アジア大陸山地部研究会

<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/mtsea/>

スラウェシ地域研究 HP

<http://sulawesi.cseas.kyoto-u.ac.jp>

◆ API Fellowships Seminar, February 25

Rosalie B. Arcala Hall (University of the Philippines) “The
Politics of Becoming a ‘Normal’ State: A Review of the Japanese
Debate over the Self Defense Forces’ Purpose and Meaning” ▽
Pornthip Apisitwasana (Researcher, Thailand) “Japanese Civil
Society and Social Reform” ▽ Rudyard C. Pesimo (Ateneo de
Naga University) “Asianizing Animation in Asia: The Legacy of
Hayao Miyazaki and Khun Payut Ngaokrachang” ▽ Kannika
Angsuthanasombat (Chulalongkorn University) “Reintegration
Program for Thai Returnees: Philippines Experience and Case
Study of Thai Migrants in Japan” ▽ Claudette May V. Datuin
(University of the Philippines) “Twenty Minutes before Closing
Time (Women Artists and Their Publics: Indonesia, Thailand,
Malaysia and Japan)” ▽ Indri H. Susilowati (University of
Indonesia) “The Amazing of Japanese Railway” ▽ Boonlert
Visetpricha (Researcher, Thailand) “Lesson of the Homeless
Management in Tokyo” ▽ Motohide Taguchi (Music
Composer, Japan) “The Influences of Jose Monserrat Maceda on
Filipino Contemporary Music”

連絡事務所だより

Letters from Liaison Offices

バンコク

Bangkok

柴山 守

スワンナプーム新空港（オンヌット通りを東に向かった環状東通り）が今年9月に開港する(!?)。鳥類との衝突事故を避けるための航空機飛行も始まった。昨年には、バンコク市内で地下鉄が開通した。おなじみのBTS（スカイトレイン）は、創業5周年を迎えた。「光陰矢のごとし」をまさに実感したのである。はじめてバンコクを訪れた20数年前には想像もしなかった都市の発展である。お世話になった連絡事務所があったスクンビット通りソーイ25、及びソーイ16は、今や大きなビルに占拠され、当時の面影はない。

これらのビル群が「グラッ」と揺れた。12月26日（日）朝7時59分のことである。マグニチュード9.0の大地震がスマトラ島沖で発生した。当日の地元テレビ放送は、連絡事務所近くのアソーク通りにあるビルが揺れたことを報道し、またプーケット島での甚大な“Tsunami”被害を大々的に伝えた。この地震は、ユーラシア・プレートとインド洋プレートが、約700マイルにわたって、約100フィート

ジャカルタ

Jakarta

五十嵐忠孝

1年半ぶりに駐在員として連絡事務所を訪れた私を迎えてくれた運転手とお手伝いさんは、さっそく“耳寄りな話”というのを語ってくれた。帰郷した際に聞いたという話をである。几帳面な運転手はそれをメモに綴っておいてくれた。前回の駐在時にあれやこれや尋ねたからである。前任者からの引継を終えた私は年度末の会計処理に頭を抱えていたからそのメモには目を通すこともしないまま机の上のうちっちゃっておいた。一段落ついてそのメモを一読した私は、思わずひざをたたいてしまった。もうながいこと知りたいと思っていたことが書いてあったからである。

話は南十字のすぐ近く、東隣りに輝くケンタウルス座の α 星と β 星のことである。この2星は南天の夜空にたいへん目立つから（いずれも一等星）だけでなく、その位置が南十字に近いからであろう、インドネシア人の目には一組の星座のように映るらし

近くずれたとされる。当時、チェンマイに滞在中の山田勇教授からは、滞在先ホテルで相当の揺れがあったと聞き、ピサノロックでは河面が揺れ、川岸の石垣が一部損壊したと聞く。しかし、連絡事務所では気がつかなかった。

この“Tsunami”が引き金になったのか、3月末までの滞在中、大変に忙しい、また充実した日々を過ごすこととなった。年末の安否情報の確認、チップさんの実家での悲しいできごと、年が明けて19th APAN International Conference in Bangkok (2005年1月24～27日)での“Historical GIS”セッションの組織化、パンさんの退職とソムチャイさんの就任、新車カマリの購入、第1回地域情報学シンポジウムの開催準備などである。このシンポジウム(3月24日開催)は、100名を越える参加者で終わることができた。この間の忙しさがヤマを越えたと思ったところで、またスマトラ沖での地震である。3月28日午後11時9分。マグニチュード8.7。幸い被害の報道はない。気ぜわしい日々は、終わりそうにもない。(研究所教授)

い。

南十字を小屋、ケンタウルス座の2星を2人の娘と見なすのはインドネシア各地に広く見られる。ジャワでは、この小屋はちょっと傾いていて(gubug péncéng)、そこへ2人の“出戻り娘”が食事を運んでいる(wlanjar ngirim)のだという。2人の“出戻り娘”は“赤目野郎”(jaka bélek)の気を惹こうとしているというが、赤目野郎がどの星かについては、アルデバランで、牛に犁(＝オリオン座の三つ星)を曳かせているとも、アンターレスで、ヤシの木(＝蠍座)に登って実を穫ろうとしているともいう。

南十字をエイと見なすところもたいへん広く見られる。この場合、ケンタウルス座の2星はエイを突く銛である。ロンボクの漁師が語ってくれた小話は次のようであった。

……聾者と盲人の漁師がエイを追っていた。舟を操るのは聾者の役目、銛を突くのは盲人の役目。

舳先に大きなエイが現れると聾者が「突け！突け！」と声を張り上げた。盲人は（見えないので）「（エイは）どこだ！どこにいる！」と応じたが、聾者にはその声がちっとも聞こえない。「突け！突け！」「どこだ！どこだ！」とやり合っているうちに、とうとうエイは逃げてしまった……。

南十字を“凧星”あるいは“凧揚げ星”と呼ぶ地方も少なくない。ケンタウルス座の2星は“凧の尾”と説明されるが、私は、これに付随する面白い小話があるに違いないと想像していたものの、実際に出会ったことがなかった。そこへ冒頭に記した運転手のメモである。その部分をなるべく忠実に訳出する

と次のようである。

……兄弟2人が凧揚げをしていた。というのも乾季の盛りでほどよい風が吹いていたから。……と、強い風が吹いて来て、あっという間に（凧に）引きずられて行ってしまった。これを見た兄が弟を助けようと追いかけているのだ……。

この小話から、凧に引きずられている弟は南十字に近いβ星、これを追いかけている兄はα星であることが明らかだが、2つの星をよく見ると、なるほど兄の方が弟よりより大きく輝いて見える。

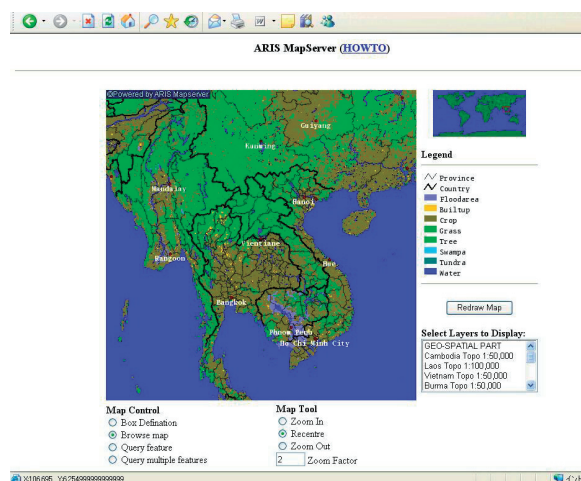
(研究所助教授)

Southeast Asian Topographic Map Database

The Southeast Asian Topographic Map Database contains rich map collections that cover nearly all of mainland Southeast Asia. These maps, often of large scale and containing detailed geographic features, are very helpful to researchers in Southeast Asian countries. Among these map collections are some that are rather rare, for example, the Myanmar topographic maps that originated with the British colonial government and were revised by the Japanese military. The following table shows a brief catalogue of the Southeast Asian Topographic Maps at CSEAS:

Country	Sheets	Scale	Publication Date
Laos	109	1:100,000	1970–80
Vietnam	592	1: 50,000	1976–80
Cambodia	289	1: 50,000	1976–80
Myanmar	730	1: 50,000	Circa 1890
Thailand	54	1:250,000	2002

The Dublin Core metadata standard was used to document these map sheets; it is a standard for cross-domain information resource description. The simplicity and flexibility of Dublin Core reduce the cost of cataloguing these large volume collections. The Topographic Map Database was conducted using Free/libre



and Open Source Software. The data management system is PostgreSQL/PostGIS, the distributed search and retrieval system is supported by the Isite/Z39.50 and Minnesota Mapserver, and the map visualization is based on 1:1,000,000 VMap Level 0.

The Topographic Map Database is available at <http://aris.cseas.kyoto-u.ac.jp/mapserver/>. Further, other Z39.50 compliant gateways or clients can access our database, as we made progressive development on the functionality of our Isite Z39.50 server to support several popular profiles, such as GEO, BIB1, GILS, etc. You may experience how our database allies with the international Z39.50 gateway by accessing National Geospatial Data Clearinghouse at <http://clearinghouse3.fgdc.gov/>.

(Reported by Xianfeng Song)

VISITORS' VIEWS

MALAY MERCHANTS AND TRADERS IN THE MARITIME TRADING WORLD OF SOUTHEAST ASIA

By Nordin Hussin



The Malay world, or the Malay-Indonesian archipelago, covers a vast land area and is home to many Malay sub-ethnic groups. The main regions where Malay settlements can be found are on the island of Sumatra, the Malay peninsula,

and parts of Borneo island. Malay kingdoms once ruled and controlled the sea lane through the Straits of Melaka, which for centuries was pivotal to the development of the trading world of Asia and Southeast Asia. As an important waterway linking East and West Asia, its strategic location between the two regions and its sheltered position between the island of Sumatra and the Malay peninsula gave it an advantage not available to areas fronting the South China Sea to the east and the Indian Ocean to the west. Through the centuries, Malay ports rose and declined along the Straits; some of the most important were Srivijaya, Melaka, Aceh, Kedah, Perak, Selangor, Riau, Batu Bara, Asahan, Pedir, Pasai, and Siak.

The role and presence of Malay traders was very important to the collection and distribution of goods and commodities arriving at the many port-towns of the archipelago. It was Malay traders who helped Penang, the newly established English port-town of the eighteenth century, survive its initial stages. More than 42 percent of merchants and traders who arrived at the port of Dutch Melaka were also Malay. And the major entrepot in Southeast Asia before its occupation by the rival Dutch was the main Malay port of Riau. The presence and active role of Malay merchants and traders could be found in many ports of the archipelago and their trading skill was felt in the ports of the Indian sub-continent and on the mainland of China.

(Visiting Research Fellow)

READING KYOTO

By Pasuk Phongpaichit



I tried *Genji Monogatari* before but had got stuck. Reading it in Kyoto, and in Royall Tyler's wonderful new translation, is quite different. The book portrays another world, but a world which was right here. Although it's about privilege, it has

messages about culture and humanity. A good polygamist! I understand now why people say it can be read again and again.

We bought *Genji Monogatari* because we are translating a Thai epic and wanted to compare other translations. Then a Japanese friend recommended *Heike Monogatari* because it was passed on by troubadours like the Thai epic. Again I got lost in it. It's about the disappearance of the world in which Genji lived. The scene where thousands of warrior-monks come down from Enryakuji and burn Kiyomizudera is stunning. It's also very didactic, about the fleeting rewards of power.

When I mentioned that thought to another Japanese friend, he said you must read *Hojoki*. After the fat tomes of Genji and Heike, this slim volume was quite a relief. And how different! The first section dismisses the indulgence of the Genji era and the power-seeking of the Heike era as pure illusion. The image of the little hut is such an eloquent rendering of the Buddhist value of renunciation.

After *Hojoki*, it's difficult to go back to Genji. But I did read Murasaki Shikibu's diary. Her work—the first novel—is a landmark in the culture not just of Japan but of the world. And she's a woman—learned, imaginative, and with a great sense of humor.

Of course I read and wrote lots of economics while I was here. But I'll remember this stay for these three classics and what they taught me about Japanese history, culture, and women. Without the opportunity for an extended stay, I would never have “read Kyoto.”

(Visiting Research Fellow)

TO BE MORE THAN A FORGOTTEN LABOR FORCE

By Viriya Limpinuntana



I have recently conducted interviews and gathered information on agricultural and livelihood systems of elderly villagers in one sub-district of Northeast Thailand. This information is intended as background for a project comparing the health

conditions of elderly people among Southeast Asian nations and Japan.

To be elderly, a person has to be over 60 years old. In labor force calculations, people of this age are often assumed to be out of the labor force or making only a fractional contribution. But information gathered in interviews with some elderly people in Northeast Thailand challenges this assumption. Not only were most elderly people found still to be very active in farming, but they were also still responsible for important household work.

Due to habit and a shortage of farm labor, most grandfathers still work their own farms. Some claim to continue farm work even into their 70s. Depending on their physical strength and the availability of supporting labor, the farm activities of grandfathers ranged from the heavy work of ploughing the land, to the moderate work of planting, weeding, applying fertilizer, and harvesting, to the light physical (but heavy mental) work of planning, monitoring, and marketing farm products.

While the grandfather works in the field, the grandmother works at home preparing meals, looking after grandchildren left by the daughter who works for off-farm wages, feeding animals, or doing handicrafts. At times of peak labor demand, the grandmother helps with the farm work after the grandchildren have gone to school.

When asked what they do with farm income left over from household consumption and paying debt, most grandparents said they would invest some in the farm and save some for health expenditures. The remainder would be used to provide assistance to children and grandchildren in need.

While discussing their farm activities and family, many elderly interviewees seemed to be in a good mood. Perhaps for those who do so willingly, the ability to perform useful functions and be meaningful to their children and

grandchildren keeps the grandparents happy. This finding also implies that many Thai parents keep giving to their children, even when in old age! (Visiting Research Fellow)

APPLICATIONS OF GEO-INFORMATICS FOR HISTORICAL AND ARCHAEOLOGICAL STUDIES IN THAILAND AND CAMBODIA

By Surat Lertlum



Geo-informatics technologies have been utilized in cultural heritage conservation, preservation, management, and research studies. For example, remote sensing and GIS can be used as tools for archaeological analysis. In various cases around the world, remote sensing and GIS have

helped archaeologists pinpoint and identify archaeological sites.

Here I will introduce three case studies that illustrate the use of geo-informatics in archaeology. The first is the use of remote sensing and GIS at the Sukhothai world heritage site in the lower part of northern Thailand. This case demonstrates how integrated technologies can be used as tools for world heritage management and for the study of lives during the Sukhothai period. The main findings include: land use change analysis; population distribution analysis; evidence of an ancient Sukhothai hydrological system; and the comparative study of ancient Sukhothai city planning.

In the second case study, information extracted from ancient maps of the Ayutthaya period was compared with current information extracted from satellite data, topographic maps, and other related information. The results of this study can be used by archaeologists to identify locations mentioned in the royal chronicles or in other documents that describe lives and locations of that period.

The third case study applied remote sensing and GIS to the identification of the Royal Road from Angkor to Phimai. This study revealed new findings, including an ancient irrigation system in the Phimai area; differing characteristics of the Royal Road in Cambodia and Thailand; confirmation of archaeologists' assumptions about the Royal Road from Angkor to Phimai, and recognition that perceptions about the Royal Road in Thailand have to

be modified.

By utilizing geo-informatics technologies for archaeological studies, we will obtain a better understanding of the relationship between cultures, peoples, and civilizations. This understanding will be of great importance to the region and its people. (Visiting Research Fellow)

LIBRARIES IN KANSAI AND TOKYO

By Nelwaty Sikumbang



Before arriving in Kyoto, I expected that my experience as a visiting fellow at Kyoto University would be limited to observing the development and acquisition of library materials in the Center for Southeast Asian Studies (CSEAS). However, I was able to observe many things about

libraries, especially the full automation and maintenance of information retrieval systems. I was very impressed by the sophisticated infrastructure of almost all the libraries I saw in the Kansai region and in Tokyo.

In the CSEAS Library, I have been cataloguing, classifying, and assigning subject headings to Indonesian and Malaysian books, especially those in Indonesian, Malay, and other vernacular languages, as well in Dutch and English, and entering them into the OPAC database. I also visited the National Diet Library and the libraries of Tokyo University of Foreign Studies, Osaka University of Foreign Studies, and Kyoto University's main campus. I was surprised when I saw the NDL's facilities, especially the automated system of service and circulation and the preservation of the collection through temperature control. The National Library of Indonesia and the National Diet Library of Japan rely on the same methods of collection development and acquisition: purchase, donation and exchange programs, self-publication, special collections bequeathed by individuals or institutions, and in accordance with government laws and regulations.

I am grateful to those who accepted me as a visiting research fellow at the CSEAS at Kyoto University. I would like especially to thank the Director of CSEAS, Prof. Koji Tanaka; my counterpart, Prof. Tadataka Igarashi; the chief of the CSEAS Library, Yumi Kitamura; and the Library staff—they have all made my stay in Kyoto enjoyable by introducing me to various aspects of Japanese culture. I would also like to thank everyone in the administrative office for their help and hospitality. Last but not least, my sincere gratitude goes to the head of the National Library

of Indonesia, my home institution, and to all its senior officials. I would be very happy if there were another opportunity to visit Japan in the future.

(Visiting Research Fellow)

UNPLANNED ENCOUNTERS IN KYOTO

By Leif Jonsson



As any other academic, I tend to spend most of my time tending to classes, lectures, articles, books, and the like, and to ignore various parts of the brain or the mind. I hadn't given the soul a thought for a long time. Most of us are trained as academics to look the other way when the soul pops up,

though it is in some ways no more mysterious than political structures, watersheds, or soil types.

The soul is like a dog. It is yours somehow and you want it to behave in a reasonable way. A dog should not be given constant attention or it will be very nervous. It also needs to sleep plenty and be in its own world quite a bit. It needs to be with other dogs for a break. You don't want your dog to know discipline and nothing else, or to be just something to show off, unless you are a particular kind of person. You don't want your dog to know too many things about politics. You need to feed your dog and the two of you need each other's company. A dog needs to play outside and to go on walks that have no purpose other than to take a walk, even when it really is not a nice day. And if it's your dog then maybe it's okay that it sometimes wants to jump up and lick your nose just a tiny bit. Some dogs are like that, some of the time.

Many people will tell you that souls are nothing like this at all. Of course I wouldn't know, but I think that the people who say this don't like dogs or people very much, and that they much prefer never to take a walk.

(Visiting Research Fellow)

2005年5月1日発行

発行 〒606-8501
京都市左京区吉田下阿達町46
京都大学東南アジア研究所
Tel 075-753-7344
Fax 075-753-7356
<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>
編集 石川 登・米沢真理子